武蔵野日曜聖書講筵

真誠愛

――テサロニケ後書第2章――

１９９２年12月６日
小池辰雄

日本の小池　終末の日　キリストの言は必ず成る　真誠愛　感謝せざるを得ず　生命を与えるもの

【テサロニケ後2】

1 兄弟よ、我らの主イエス・キリストの来り給うこと、又われらが主の許に集うことに就きては、汝らに求む。2 或は霊により、或は言により、或は我等より出でし如き書により、主の日すでに来れりとて容易く心を動かし、かつ驚かざらん事を。3 誰が如何にすとも、それに欺かるな。その日の前に背教の事あり。不法の人、すなわち滅亡の子あらわれざるを得ず。4 彼はすべて神と称うる者、および人の拝む者に逆い、此等よりも己を高くし、遂に神の聖所に坐し己を神として見する者なり。5 われ汝らと偕に在りし時、これらの事を告げしを汝ら憶えぬか。6 彼をして己が時に至りて顕れしめんために、彼を阻めおる者を汝らは知る。7 不法の秘密は既に働けり、然れど此はただ阻めおる者の除かるるまでなり。8 斯て其のとき不法の者あらわれん、而して主イエス御口の気息をもて彼を殺し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給わん。9 彼はサタンの活動に従いて来り、もろもろの虚偽なる力と徴と不思議と、10 不義のもろもろの誑惑とを行いて、亡ぶる者どもに向かわん、彼らは真理を愛する愛を受けずして、救わるることを為ざればなり。11 この故に神は、彼らが虚偽を信ぜんために惑をその中に働かせ給う。12 これ真理を信ぜず不義を喜ぶ者の、みな審かれん為なり。

13 されど主に愛せらるる兄弟よ、われら常に汝等のために神に感謝せざるを得ず。神は御霊によれる潔と真理に対する信仰とをもて始めより汝らを救に選び、14 また我らの主イエス・キリストの栄光を得させんとて、我らの福音をもて汝らを招き給えばなり。15 されば兄弟よ、堅く立ちて我らの言あるいは書に由りて教えられたる伝を守れ。

16 我らの主イエス・キリスト及び我らを愛し恩恵をもて永遠の慰安と善き望とを与え給う我らの父なる神、17 願くは汝らの心を慰めて、凡ての善き業

と言とに堅う為給わんことを。

●日本の小池

私は、皆さんだからはっきり言いますけれども、私は単なる「召団」の代表者ではないんです。もう、

「日本の小池」

ですから。どうぞ、そのつもりでいてください。今はもう、私は単に「召団」ということを考えない。私の存在は非常に大事な使命を持っているので、皆さんもそういう自覚でいてください。

私は自分で言ったらおかしいけれども――決して自分を言っているのではないのですが――キリストのことを誰が、

「無者」

と言ったか。イエス・キリストのことを「無者」なんていう言い方は実は、世界的な表現なんです。私は非常に天界からの聖霊の力でもって示されて、ものを言っているのですから。

「完全に己なき無となったときに、完全に無限無量な神が彼の中に入った」

でしょ。

「私は何もできない、何も言えない」

と、キリストは言っている。だから、私は「無者」と言う。キリストの現実を一言でいえば、無者なんです。けれども、神が一切だから、

「無限無量者」

なんです。

「無即無限無量」

とはそういうことです。私は詩の中で大きな証言をしますけれども。

こないだからも言いましたように、大人物は西郷隆盛。本当のクリスチャンは賀川豊彦。内村鑑三ではない。賀川豊彦は本当のキリストの証者です。

キリストは、

「神の無者」

であり、我々は、

「キリストの無者」

です。

「十字架でもって無にされたから、聖霊という無限無量のものが入ってくる」

だから、男でも女でも、老いたる者も若き者も、もの凄い力を持っているんです。烈々たるものを持っている。

私は賀川さんという人に本当に感激したんだから。内村鑑三ではない。たとえば、あの

関東大震災のときに、賀川さんは、自分はまだ半分病身ですよ、それでも直ぐ出かけて行って、東京のまん中で、本当に自分で歩きながら、人助けをしているんです。無教会の人たちは、

「ああ、この大震災は神の審判だ」

なんて言って、たかをくくっている。そんなのとは違うんだ、本当は。

そういう意味で、皆さんは、

「本当のクリスチャンは賀川豊彦、大人物は西郷だ」

という、私の気迫を受けとっていただきたいと思う。あなた方は大使命を持った一人ひとりの存在ですから、そういう意味でもって自覚してほしい。

キリストは、

「我は柔和なる者」

と仰ったが、それは柔和でしょう。柔和だけれども、キリストほど勇ましいひとはない。でなければ、あんな戦いはできない。

●終末の日

それでは今日は、テサロニケ後書の第２章を

「真誠愛」

と題してお話します。

1兄弟よ、我らの主イエス・キリストの来り給うこと、又われらが主の許に集うことに就きては、汝らに求む。2或は霊により、或は言により、或は我等より出でし如き書により、主の日すでに来れりとて容易く心を動かし、かつ驚かざらん事を。

パウロの表現が、言葉が少し飛んだような表現をしているから、ちょっと分かりにくい文章なんです。

「キリストの再臨」

ということは、本当に彼らは正直そう思っていた、

「もうじき世の終りがくる」

と。それは正直、非常に楽しみに待ってはいたんだ。

「或は霊により、或は言により」

の、「霊」は聖霊のこと、「言」は智慧の言葉です。

「或は我等より出でし如き書により」

の、この「如き」が大事なんで、

「霊によって言によって、我々から出たのと違うのだけれども、そういった如き書によって、主の日は既に来たといって、たやすく心を動かしているご連中があるが、そんなことには驚かないでくれ」

という意味なんです。パウロの言うことを真似して、そんなことを言う者があるが、それで驚かないようにと。

3 **誰が如何にすとも、それに欺かるな。その日の前に背教の事あり。不法の人、すなわち滅亡の子あらわれざるを得ず。**

「その日」というのは

「主の再臨の日」

のことです。「その日」という言い方は、旧約の預言書でもよくある。

「終末の日」

のことです。

「その日の前に背教の事あり」

と。これは面白いですね、その前にちょっと背教の事があると。「アンチ・クリスト」が現れる。「不法の人」とはアンチ・クリスト、キリストに反するやつ。そいつは地獄に落ちる。このことはダニエル書にもちょっとそれに似たことが書いてある。「背教」のことは黙示録の13章にも出ている。

4 **彼はすべて神と称うる者、および人の拝む者に逆い、此等よりも己を高くし、遂に神の聖所に坐し己を神として見する者なり。**

「此等」とは他の信者のことも言っているんだな、ユダヤ教のことも入っているかもしれない。そういうとんでもない奴が、不法の者が現れると。「不法の者」というのは滅亡の子なんだ。神の霊法に背くやつがこの「不法の者」です。

5 **われ汝らと偕に在りし時、これらの事を告げしを汝ら憶えぬか。6 彼をして己が時に至りて顕れしめんために、彼を阻めおる者を汝らは知る。7 不法の秘密は既に働けり、然れど此はただ阻めおる者の除かるるまでなり。**

それまでのはなしだと。

8 **斯て其のとき不法の者あらわれん、而して主イエス御口の気息をもて彼を殺し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給わん。**

これは素晴らしい言葉だね。

「御口の気息をもて彼を殺し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給わん」

と。偽預言者、偽福音者、こういうのは一番悪い。いわゆる罪びとよりかなお悪い。こういうのはたちが悪い。霊的高慢というのは最大の罪なんです。

●キリストの言は必ず成る

9 **彼はサタンの活動に従いて来り、もろもろの虚偽なる力と徴と不思議と、**

「活動」は「エネルゲイア」、エネルギーのこと。悪霊だって、いくらでも霊的な現象を起こす。だから、惑わされる、

「**虚偽**なる力と徴と不思議」

で。これは神さまの、キリストのものかと思ったら冗談じゃない、そいつはサタンの力だと。

「**徴と不思議**」

とはよく出てくる言葉だけれども、それをサタンがやるんだからね。サタンという奴は悪霊だから、とにかく霊的な力は持っている。

10**不義のもろもろの誑惑とを行いて、亡ぶる者どもに向かわん、彼らは真理を愛する愛を受けずして、救わるることを為ざればなり。**

この「真理を愛する」の、

「真理」

という言い方が、私は気にくわない。真理というのは、私はもちろん好きですよ、藤井先生は真理という言葉が大変好きだったけれども。真理はもちろん真理です、

「これは真理だから」

と。もちろん大事な言葉ですけれども、キリストに関するかぎり、「真理」と言ってはいかん。ヨハネ伝に、

「**我は真理なり、生命なり、道なり**」

というキリストの言葉がありますね。あれを「真理」と訳したらダメなんです。真理というと、我々の概念の真理と違うんだ、この聖書の真理という言葉は。これはもともと

「アーメン」

という言葉だ。「アーメン」という言葉は、ヘブライ語で名詞だと「エメツ」という。これはアーメンからきている。

「アーメンなるもの」

という意味です。黙示録にも、キリストのことをそういう言い方がある。アーメンが名詞になるとエメツという言葉になる。これは「まこと」であって、しかも、

「誠」

という言葉は、

「キリストの言は必ず成る」

という意味で、この「誠」という字は私は好きですけれども。キリストの言は空言ではなくて、必ず実現する。

「真誠」

これが「まこと、アーメン」という言葉なんです。

「真にして必ずそれは成るもの」

それは「真理」ではない。「理」ではない。理屈ではない。もちろん、真理の理は別な意味では大事な字ですけれども、「真理」という表現は今の我々の概念では観念的になる。キリストが、

「我は真理なり」

というときには、「真理」というと何かズレるんだね、観念的にひびく。だから、「真誠」がいい。もうひとつの言葉は「本もの」でいい。

「我は本ものなり」

でいい。それは、ヨハネ伝の15章で、

「我はまことの葡萄の樹」

とキリストは言われたでしょ。

「葡萄の木はあるけれども、私が本当の葡萄の木だぞ」

と。おもしろいね、キリストは。

「例えば、私は葡萄の木だ」

とは言いやしない。

「我こそはまこと葡萄の木だ」

と言う。

「あそこに葡萄の木があるが、私が本当の葡萄の木だ。お前たちはその枝だ。連なっていろ」

と。

●真誠愛

だから、「キリストを信ずる」なんていうのは、

「キリストに連なる」

ことが本当の現実で、いわゆる「信ずる」ではないんだ。でなければ、力は来ない。

「キリストは神の子である」

ことを信じたって、

「キリストは罪をあがなった」

という命題を信じたって、どうにもならん。「理」でなくて、「本もの」です。

「キリストは本ものだ」

と。それは「アーメン」という字からくる。もともとアーメンだから。

「我はアーメンなるもの」

という。アーメンなる実体なんです。キリストは実体なんだ。

「我は真誠の実体なり」

なんだ。

「真誠の愛」とは、

「真誠（キリスト）が愛する」

ということと、

「真誠（キリスト）を愛する」

ということ。この「真誠愛」という言葉は、主格的なことと、目的格と、両方とも表す。もともとは主格的です。キリストの愛がこの真誠愛です。その真誠なるキリストを愛することがまた真誠愛だ。真理ではないんだ。

「実体たるキリストを愛する愛」

なんです。ということは、キリストに愛されているから。愛はキリストからむしろ来ているから、リアクションの愛だ。反射的な愛だ。

それは、新約聖書のヘブライ語の原文を見ると、

「ハー　エメツ」

と書いてある。「ハー」というのは定冠詞なんです。

「これこそは、これだけが真誠なるもの、アーメンなるもの」

と。「ザ　アーメン」なんだ。「ハー」というのは英語の「ザ」にあたる。

「真誠なる唯だ一人のもの、唯一者、キリスト」

だけが、

「ザ　トゥルース」、「ディ　ヴァールハイト」

なんです。キリストは「ザ　トゥルース」なんだ、他にいない。だから、ヘブライ語の新約聖書の「ハー　エメツ」という表現は素晴らしい。定冠詞がついている。これが本当なんだ。ギリシア語でも、

「テーン　アガペーン　テース　アレテイアス」

「このアレテイアなるものの愛」

という。「テース」という定冠詞がついている。

「真誠なるもの、ハー・エメツなるキリストを愛する愛を受けずして、救わるることを為ざればなり」

ということになる。それで非常にはっきりしたでしょ。

「ハー・エメツなる、真誠そのものであるところの、唯一絶対の真誠なるキリスト」

という。そういう意味で「真誠」という言葉を特に使ったんだ。普通の人はこれを見たってわからないけれども。この

「真誠愛」

ということです。

●感謝せざるを得ず

11 この故に神は、彼らが虚偽を信ぜんために惑をその中に働かせ給う。

神さまは、ほっとく。

12 これ真理を信ぜず不義を喜ぶ者の、みな審かれん為なり。

それではっきりする。ここのところは、註解書がいろいろなことを言っているけれども、結局そういう読み方をしなければ読めないんです。

13 されど主に愛せらるる兄弟よ、われら常に汝等のために神に感謝せざるを得ず。神は御霊によれる潔（きよめ）と真理に対する信仰とをもて始めより汝らを救に選び、

テサロニケの信者はよいから、パウロはまた楽な気持で書いているわけです。「兄弟よ」というのは複数です。

「感謝せざるを得ず」

という言い方は大変いい。ざるを得ない世界が本当の世界なんです。こうしようか、ああしようかではない。選択ではない。必然なんです。天的必然。

「ノー　アザー　キャン　アイ　ドゥー」

「ニヒツ　アンデレス　ケネン」

ということです。

「御霊によれる潔（きよめ）と真誠（まこと）に対する、本ものに対する信仰とを持て」

ということ。だから、

「真理に対する信仰」

なんていったら、分からないでしょ、普通の言葉だったら。我々の概念では、

「真理に対する信仰なんて何だ?」

ということになる。真理というのは概念的な言葉だから。だから、真理は「まこと」とふりがながしてある。これを「しんり」と読まれては困ると思ってね。

14 また我らの主イエス・キリストの栄光を得させんとて、我らの福音をもて汝らを招き給えばなり。

これは主体は神さまだよ。そのように招いてくださると。

「真誠の主体なるキリストに対する信仰とをもて始めより汝らを救に選び……福音をもて汝らを招き給えばなり」

というのは、みな神さまのわざです。

15 されば兄弟よ、堅く立ちて我らの言あるいは書に由りて教えられたる伝（つたえ）を守れ。

「私が言っていることは本当のことだから、それを学んでもらいたい」

と、パウロは語るごとに懇ろに言っているわけだ。パウロはもうキリストにとっ捕まってしまって、そして、御霊で動いてものを言っているから、自分の主観的な確信で言っているのでないから、間違いないです。まだ主観でものを言っているうちはダメだからね。止むに止まれずして言わせられているのが、パウロの言葉だから。

聖書は決して人間の思想ではない。

「聖書の思想は……」

なんてよく言う人があるけれども、聖書には思想なんてものはない。「思想」というのは人間の思う想いだから。聖書には思想なんかありはしない。もし、思想というならば、神さまの思想しかない。思想だったら、永遠の永続性なんかありはしない。人を動かしはしない。いかなる思想も一人の人を救うことはできない。カントであろうと、プラトンであろうと。これは天来の啓示の真誠、本ものの言、神言、神の言だ。御霊の言は霊言でもある。

●生命を与えるもの

神の言は必ず行為に裏付けられている。人間の言は行為に裏付けられない。だから、

「初めに言あり」

ではないんだ、本当は。

「初めに行為あり」

なんだ。そこはゲーテは偉い。ヨハネ伝の第一言「初めに言あり」を「初めに行為あり」と訳した。『ファウスト』の中に書いてある。

「これは言ではない、行だ」

と。

「一切は行である」（ディ　タート　イスト　アッレス）

という言葉が『ファウスト』の第二部に出ている。言葉の魔術者みたいなゲーテがちゃんとものの本質を見た。とにかくドイツで第一人者というのはゲーテです。凄いやつですよ、あのゲーテというやつは。

16 **我らの主イエス・キリスト及び我らを愛し恩恵をもて永遠の慰安（なぐさめ）と善き望とを与え給う我らの父なる神、17 願くは汝らの心を慰めて、凡ての善き業と言とに堅（かと）う為給（し）わんことを。**

16～17節はパウロの祈りだ。美わしい言葉だね。

それで、２章が解けたでしょ。

「世の終りに不法の者が現れる」

という。今でも不法の奴らがいる。いつでも不法の奴がいる。だから、キリストの中に入っていないと、足をすくわれる。まことしやかな奴がいろいろいるから。外見上よさそうなんだ。言うこともごもっともなことを言っている。そして、それに引っ掛かる。白きサタンだ。初めから分かるようなサタンは大したことはない。

「狐にばかされるな、狐や狸がたくさんいるから」

と。もちろん、真面目な哲学者のいろいろな言葉も、人間的には尊重するものはたくさん在りますよ。けれども、生命を与えるものはキリストのほかにない。本当の光をあたえるものはキリストの他にはない。大変な方です、イエス・キリストは。桁が違う。お釈迦さ

んともケタがちがう。単なる悟りの世界ではないんだから。お釈迦さんは遂に悟った。遂に悟ったのではないんだから、キリストは。初めから神の現象体で、12歳のキリストに宮の教師たちがかなわないんだ。皆さんは、大変なこの真誠愛の中にいらっしゃるんです。

私はキリストを

「無者」

という。外国人には分からないです、「無者」なんて言っても。これは空無の無ではないからね、この無というのは。

「私が無い」

ということなんです。

「無的実存者」

ということだ。それが

「無限無量者」

なんです。

「即」

なんです。

「自分が無いと、即、無限無量なものが入ってくる」

今は昼間だけれども、夜になるとまっ暗でしょ。だけれども、太陽が昇ってくると、そのまっ暗の無の世界に、無光の世界に光がさす。

「十字架で私は無にされた。無という現実に」

相対的人間小池は無でも何でもない。ところが、十字架を受けとっている私の根元の小池というやつは無者なんです、

「キリストの無者」

です。だから、

「キリストの聖霊の力が入ってきて、生も入ってきて、自由自在になる」

本当の自由とは、御霊の世界でなければ、持っていない。普通の人が言っている自由なんて、ひとつも自由ではない。自分に囚われている勝手気儘な自由なんです。そんなものではないんだ。

私はテレビで一席やりたいくらいです。いわゆる専門家ではない。私みたいな本当の素人が本当のことを言うんだから。神学校も何も出ていやしない。これは有難いね、聖書の御言の背後の響きが読めてくるから。